

花江都  
歌舞妓

花江都  
歌舞妓

年代記

初編

三

津田文庫  
文庫 1  
1767  
3



早稲田大学  
圖書部蔵書

花江都  
歌舞妓

年代記卷之二

つた文庫

東都

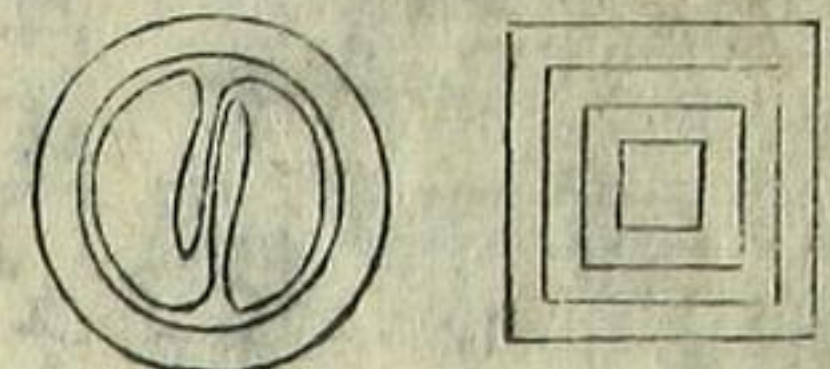
談洲樓 馬馬著

○享保十二丁未年ヨリ元文元丙辰年マデ  
十年ノ間ノ狂言ノ記ス。

享保十二丁未年 春中村座 榎根元曾我 五郎時宗 田太郎 十郎祐成 小宗十郎  
 二藤左衛門 小富沢半三郎 朝比奈小坂田半五郎 梶原源左 大谷  
 龍左衛門 大磯のどろに山下令作 けん坂のせうく 袖邊之論野 おあさう  
 新庄清之助 松本幸四郎 お家の愁歎 流言のとも 大坪判對面 鳥柴の雉子  
 の献上物 せり婦 八国十郎 宗十郎 友人 せり じと 其の郎 大坪 さんあり  
 何とも 大く 當り 則せり 次 次 次 同未年 二月 中村座 榎根元曾我  
 宗十郎 清玄 幸四郎 宇津原新之助 せり 玄次 ころと 下 之 せり

世居年代記 卷之二

010190605510



# 權根之曾我

ゆづりこちんがんそが  
まき番目

鳥柴の  
せりぬ

友人のけ合

中村隆



十郎孫成  
沢村宗十郎

五郎村宗  
市川團十郎

## 鳥柴のせりぬ

曾我十郎  
同 五郎

沢村宗十郎  
市川團十郎

十年中平  
●お母さんから早稲が君を殺す。兄上る所の鳥柴の雉子合鳥柴を  
中のきをせりぬ。お母さんお怒りなす。お母さんお怒りなす。お母さんお怒りなす。  
残きも。お母さんお怒りなす。お母さんお怒りなす。お母さんお怒りなす。  
お前さんお怒りなす。お前さんお怒りなす。お前さんお怒りなす。  
賢い人もお怒りなす。お賢い人もお怒りなす。お賢い人もお怒りなす。  
と中鳥の涙お徳ある。お中鳥の涙お徳ある。お中鳥の涙お徳ある。  
されば論語郷黨の篇お子曰山梁の雌雉耐ある。おされば論語郷黨の篇お子曰山梁の雌雉耐ある。  
鳳凰せんおかきつて徳まを。お鳳凰せんおかきつて徳まを。お鳳凰せんおかきつて徳まを。  
麒麟もおお根山角の肉ある。お麒麟もおお根山角の肉ある。お麒麟もおお根山角の肉ある。  
おのうらむお花をぬ。おのうらむお花をぬ。おのうらむお花をぬ。

せまけ物柳きくちちと名ばひて皇五帝は服は飾を付させり  
そ我の日の本れをむし神皇切石吳敵を亡也り  
はつる名号て是を雉園とらふまうと二十七代孝徳天皇の西宇長門の園より  
白き雉子を指すは是泰平のすもそ別改曆ありて白雉元年と改む  
聖代の手号也又中絶を高村の守あまの舟よあまる雉子のつま鳥あおのが  
あつるよまれつ滅ぶ雌雄睦く夫婦へつる名号也  
鶇の嘴のこひまひはちもれまもまじかのまうひの枝まづくを木のあま目  
木冠のうら龍耳一むん赤唇の尻喰ひち  
なるるる淋戸物町であるまじ梶原辰光の安のときそのまうら  
さつとちちやぼちおんやの欲の難服を割はみ回るは上申とて過云  
とあひあかるといふととる  
かせ腕さうて是非もなく言をまねるうもりの級羽にしていれどもそのまうら

と結をうひまむす  
し字と篇はほはくのみと書いり  
とらむまのあやうたもあつていり  
せうびんがら身らのあまもい  
まればまも  
鴨あつてさふからてはほく  
鳥のち中のそうもん  
えひせり人の耳あかあくと  
あひてとらくと  
羽ぶりと兼はとも同  
ても五郎が同うら  
一とちの勝負そや

夕影の露と消時立次のりの多れ劫念をしてまむむら。ちうせうと替つて  
 ちよしき絶の首めへ降敷け槍がほじぶんざい。まらぬとらふて六鶴の餌のみも  
 あらね槍けちりく。ほまて延てはし出ると腕まきへ在束のかの中將の都も。いざ  
 りふねとちるを脱力の上るね驚狂けつむが室船朋くを擲くふ霧の弱武者  
 だの正月まらちあ美止や贈らうはひの掛しほぞ。処らこまらばもうやまうま  
 人の西領をらつとねく我物がほふまをいさる鳥さ里のまひざら。堀窟と庄  
 莫耶が劍あまま下しのまらうら。まらと石割えんまら。閻魔のあひの訟より  
 杉船長のほあひく。まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 鬼才△みやここのまの羽のこまをくらふまの声。切一落こいびをまら。  
 △目をかき入る橋ぞろぞ故ふ懸特よ。四河冥半も兼相まら△まらまら  
 △まらまらまらまら。ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら  
 かくて肘をまて。まて槍やの霧のたももある△それよ古出羽の國ひらうの

内裏へ霧の子とまら。起霧跡まらりしお鏡のまらてこれをまら△子霧  
 いろて毛を養ひ羽をまら。八幡ま飛行数万の槍をかこらひて終も親の  
 故をまら。かまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 年身の本意を遂まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 村まら△蜀魂蜀魄。鬼才△まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 ●陸ま迷る場まらまらまら。肘節を行て月日星まらまらまらまらまらまらまらまら  
 ぶまはれ槍やの霧の△げまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 ひまられまらまらまらまら。祝のまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 なる●これ△まらまらまらまら。中村の古果もまらまらまらまらまらまらまらまら  
 たるの片霧。ちまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 よるもまらまらまらまら。まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

▲いまだとせきの子。百ちん等の智仁勇。これぞ古今のニケの庄うさみん。  
 矢の標矢多。拵の兄弟。紅白梅。▲香柴の古実。秋上物。枝の長き七尺。  
 ▲あまのいさ。五ふ小切。修の枝踏さる枝。▲為復の毛を少し。うらちじ。大  
 みまの石を伴ひ。▲残人の雪。跡を付と。▲鳥のま。村系はる。▲は毒の眼。大  
 君が。あつ折花。▲射もあぬ。のあそ有る。▲これ今日の雄。いせん。徳五  
 雄子の捧。の。▲せん。あつと打納。ふかこの雛。▲さうさ。白雉。此は。徳  
 考。飛天。至の魚。淵。▲涌を忘れぬ。雀子の。さみ。果を。さみ。よの  
 ●松のふ。歳も。さうさ。▲君。よひ。られて。幾。代も。●ん。せん。の。おん。の。中。あき  
 ず。▲。雉子の。けん。上。た。く。は。同。中。さ。ん。た。ま。う。の。は。毒。

同未生 四月 甲陽軍勢重 國十郎。字。十郎。伝。玄。彌。信。川。中。嶋。の。石。大。評。判。

五月。國。十。郎。荒。岡。泳。太。め。七。首。蒲。刀。賣。の。せ。り。ぬ。秋。か。は。五。三。坊。め。て。館。賣。の。

せりぬ。ぬ。り。霜。月。本。都。より。六。谷。度。活。若。女。取。相。浪。尾。の。に。坂。東。考。之。郎。下。れ。  
 顔。之。世。中。村。在。八。棟。太。平。記。國。十。郎。楠。正。成。の。役。侍。弁。五。郎。七。方。正。行。也。

初。ふ。ん。ゆ。ん。事。の。せ。り。ぬ。性。人。感。念。と。度。活。大。森。考。七。國。十。郎。大。塔。の。宮。  
 今。冠。白。衣。度。活。お。負。れて。の。後。小。西。人。幸。塔。婆。列。の。あ。り。事。者。字。十。郎。

市。村。座。紅。葉。軍。記。坂。東。考。之。郎。と。江。大。和。之。介。た。け。田。ち。る。の。ふ。竹。之。元。

山。本。勘。助。と。五。郎。は。ん。月。姫。小。伊。之。郎。並。江。女。房。小。早。川。初。敷。か。り。考。之。郎。

之。五。郎。と。人。大。島。り。大。評。判。森。田。み。か。り。豊。年。太。平。記。國。十。郎。細。六。郎。在。橋。門。の。

役。長。崎。通。解。由。在。橋。門。小。早。川。五。郎。と。人。大。島。り。大。評。判。森。田。み。か。り。豊。年。太。平。記。

圓十郎ごん忠信評判つる同十四回年 妻中村座 扇惠方七郎 圓十郎矢の根  
 五郎じめて勤る古今の評判をけ耐だうらまう船を又浄する未代家の義  
 こころは五月までには船を建一火矢の根氣といふ二番目おととど  
 荒五郎義を備あて江戸町にせぬ相ふし黒船の忠信備門大谷彦治大坂  
 下のせぬ大評判家十郎の十郎を五郎が枕上よりめり始りあびと  
 のせぬぬのらふ今年さいふんの歳且ぬぬ向と入るは

雪きけりうもるこ今まぐ大晦日

大磯のらうに勤る即二のま津川かろん大評判七月まで大入り市村けら  
 徳養老七郎 幸四郎鬼王子郎中老五郎五郎お竹と忠せらくお伊郎上藤お  
 三浦右衛門赤木刀之助圓勝なり森田けり 東山長生殿 白山丸京お  
 山本彦五郎能狂言の栗田はのこおごう堀井早川新勝友人十二段の

浄よりか合の平評判よりけま門之助終る

評判記よ曰

上上吉

市川門之助

中村座

コレく頭取評判仕して派をあらわさすれはと評判しそせん  
 五十二類の法かはじ新涅槃像の徳を洋みかたされぬ此君も今こけの  
 津みあいて無類の若衆わかし弘法大師も古今未曾有のつらと仰

られし君男之形まねこの秘迦ともほらびた九一さぬといふおこの正月  
 伏見日赤あがりの雲をかかれて惣中そうちゆうの役者子位幕川馬の海防役  
 番附火繩ばんぶちひもを賣仕切場木戸の若者といじり楽金の雙立髪うつりを  
 髪らまがれて秋心のいろをえせ誇らんおいらもさうら形町かたての曾我のかみ  
 とくろゆゆりて此君のさいごお語八王子の炭焼すとも袖をぬるる老ぼ

當曾我子國三郎のお役世世の元納免扱もく残念のいなり。又あかすは  
右左の隨市川の門と波瀾の門生丸一の姿を石となりて。あの子の後者附  
曜譽義顯信士と極樂の一枚えんふ無き世のいなり。

深川本誓言寺中。鈴園院の残とけ門と助のいなり。あかすは中衣の衣袋を  
紋と付ることなり。予十二三の比まを男の腕の○の下に市川門と助命

と判し。幸若舞人もいなり。猶月中村座。梅屋増禮と護屋。園十郎名護を

山三郎二む目あかり方へ百夜のかよひぢ雪あり此出。度治不破の侍在馬門

あて今川仲秋も彦三頼兼ふ宗十郎あて。けいせん買の咄の正と評判なり。

おげりおあさんお園お伊之郎あり。市村座顔見世。長生殿白髪金時。幸四郎

金時山流お早川をせ。波田お園お治在馬門。新立前め。唯成お佐の川

万葉を村もまええ服しては十郎と改名を市村座大入大當り。森田座

**矢野長者金種** 牛と右お早川新勝治木の三郎。山本彦五郎。龜井の六郎

山本京四郎。依前幸四郎。鎌倉長九郎。中一。餘賣の拍子。兼大當り。

**同十五戌年 春市村座 年曆幼そ** 依の川万葉。風折の役大當り。後一。五郎

時宗の役男だての仕うち。勘者即少將の役とせぬれり。は。けんを十八寸

存とと出合。小道具は。のせり。大評判。二月廿五日。松本幸四郎終る。

**白巻草然直道大徳** と名を珍む。後日 **曾我矢立杖**

平此巻徳多清行を親之侍つ。新五郎。おん万葉。お中。小袖の及行

大評判大入五月 **非人敵うち** 新五郎。春若治郎。右馬門。高市武右衛門。園氣

加村。田右衛門。中嶋。三浦。右馬門。評判。二子塚東都。お万葉。姉妹。二。後

浅間嶽大入。同春中村座。役者。あてあり。不入。幸十郎。薦信の五郎。

これ十六年。以。五月より七月まで。大入の狂言。なれり。時。あてあり。二月十九日。



元祖園十郎二十七回忌此節父牛世ありし財業次おぼしくす好友江戸丹  
 おんで終まる。その年月附日と過去帳に記し朝夕香飯を偲んで念比よ香煙せ  
 とるや。二代目と并おれをまゐびく。元禄十七年より享保十五年までの亡人  
 七十餘あり。戒名俗名とくくおし其役者のほろの藝を英一峰此画に  
 写し舊知の俳人の發句お意を述將亡父追福の詩歌連俳集お成りもに  
 横本五郎大卷二冊とし父の恩と題号して貴賤をいとし知らる人く送るこ  
 以とも一紙は後とも受と滅よめる妓流の者ハ化力と以て追名を營む中其  
 事さうし人く是を奉て文と述て賜りるとかや。されば今七代目園十郎よ  
 まて改名追名成りもいさうの指抄して配るのさる泥中の蓮と稱とすし。  
 ○父の恩此中

吊故才牛辞

孝子懐懐の意の春の霜は履の謂いあはば花の雪は踏て少  
 老夫男女をいれと惜しむ如月十日あり。九日といふれたり  
 そし其周已年回毎に三升父の家名を起して既而二十三回已心小  
 孫子升五郎祖父の追名とて愛らしたせりぬのほまろきかたは実  
 佳名不飛かた鬼のあまうけりてや。よはとびるひなんそん夫清圓が  
 いくらえし。後その嗜好をありるも今追名の未り吟詩金連排次  
 集めて洋奠とる事其公至れり。これ父の難波舊徳の門おなれ  
 るも才牛の其表徳も父の十善法名海喜母ハ妙壽其先徳洲播谷  
 村の官田農めて堀越氏とるや。然るも十花耕収の業を操ひて任校  
 の義を重し肥壤の徳別を去てたす才牛は瀧り。繁糸の江都お才  
 住たり時小萬治三年庚子和泉町はて才牛を生あり。童名海老翁  
 幼より性妓藝小こころ。因り妓家小入りて市川園十郎と稱さ又が  
 任狭の勇氣を受て荒事といふの道を開たり。紅粉を以て遍身と

淨り。二升の鐔の大さ。日の丸にちんまは扇を比の離と狂言派時代  
 狂言のほぐれら仕組大當りとも打とつ才牛より始れり現は藝中  
 の太祖と稱をさ。さて世も賞するの沈物ま。五月の大太刀。二升の鐔を  
 本と一枚繪製法り。唐錦の華紋。二升の鐔。其名唐土の  
 核場。及へ。皇都の嬰見。困す即せ。手と揚。手と揚。手と揚。  
 奉を。かく和漢。知。父の容貌。在。親。似。て。ふ  
 兼屋の大鏡。今。父の手澤。存。其。送。嚴。年。の。矢。の。根。は。麻。石。で。  
 曇。た。死。す。と。わ。れ。さ。れ。の。孝。情。此。孝。情。周。る。ふ。ゆ。才。牛。の。至。孝。も。  
 既。世。不。知。り。と。流。し。淨。喜。り。樂。多。未。だ。履。物。を。待。て。て。入。て。  
 手。と。揚。あ。れ。が。賢。曼。の。手。と。揚。怠。倦。を。同。家。に。在。と。出。入。必。面。と。  
 日。々。寒。暖。を。尋。ね。故。ふ。又。他。人。敬。重。さ。る。ゆ。り。と。や。ち。是。才。牛。の  
 敬。養。い。ら。れ。る。故。之。升。又。父。を。慕。ひ。今。ま。て。に。從。は。れ。を。恨。む。と。い。ふ。も  
 幸。小。慈。母。の。存。さ。る。が。恨。び。昔。々。者。裁。を。癢。せ。と。や。今。二。升。志。は。迷。ぎ。

功の成るるを慶し追慕の孝情を感じたまはに。おのづから同橋の夫と  
 うるがれべし。は。と。や。一。句。也。

大利のむらやせまゆのト辛夷桐葉園 白公羽  
 苦菜もよとて雪解汲沙弥 三升  
 かさみうの藁あせまぐきの庵いぢり 文声

贈。覺。榮。居士。二十七回忌  
 法。蓮。一。章。二。句

きささうらや死す朽せぬ花の下

○ある僧の云日本市川團十郎といふ力者ありや。  
 中華より商舶来住。真画を傳。ありて。見。傳。り。と。  
 長寄よりの文通なり。是。此。夫。の。根。五。郎。の。る。と。し。

父の名を継て化の國まで且つうとる。未曾有の  
参り無比類孝子なれぬ。

冥加あれ手向か摘もあま自在 湖十

○追福の佳作凡三百余吟の實よ

は秘念佛ふと一まるまば。

佛とよ水お風の和訓の非 三井

余の繁妻なれば記ささ。

中村座春狂言評判をりめて不入五月より園十郎清去。これもありありど  
あもなうして市村新五郎佐野川万葉の評判をりなりし。秋狂言  
中村座 各月五男 雁令文七お修三郎安の平右衛門彦三郎。あてん市右衛門は  
度治極印千右衛門宗十郎雷庄九郎は園十郎は狂言りりれも大當りなり。  
せりぬ園十郎宗十郎友人仙の由江戸中これをはさみ遊里の藝者入りの

おおよび子供まもるをりおのじとや。十月まで大入なり。は五人男のせりぬ  
次の子よりなる

霜月京四條より名女形瀬川兼忠下る顔見世中村座 入船野小島

園十郎河津の二郎あてまゝ思ひまゝとら泳者娘はまゝあて小野のおり  
と名を借り入るまゝ。古文のまゝお菊おかんじれ者となれりゆよそ懐  
て入る欄腰ももて女の名れうべを懐中させらるゝと外あられまゝ思ひ  
氣らひ七小町のふ他大さゆり一番目清盛大谷度治二を月二役股五郎  
兼忠と思ふと築のたてあり。宗十郎盛久あて徳ながら并の女房白たえ  
ふ伊之郎朝よ七之郎は盛盛お大谷お左衛門は右祐好も、甫右衛門は田の  
ふ市井五郎。おまも大評判なり市村座へ 平假名書 佐野の源左衛門は  
新の郎青砥左衛門お坂東彦三郎女房橋尾よ万葉少條時定よ藤村中十郎  
赤星を郎武者も各五郎なりまま中とらひ不當なり。本村田所

かりが孫文七

萩野伊三郎

深物げじのせりぬ

中村座



# 肩立男

第三番目

安北平右衛門

坂東春三郎

安の字げじの

せりぬ



大当り

○ かりが孫文七せりぬ

萩野伊三郎

「肩立男」として白人とび新町新氣をのみ落して一人女見よ越く蘭ゆ秀よる  
 新造の茶も香しんまの揚價を落して四つ橋を渡る志争う強し。竿の  
 先へ鈴を附せらる極つて相争極む。さらるが空胡投まらほも當るもの  
 を幸ひ小紋宙に揚げて中形のおやう次第の深加減をみりあせてはな  
 のいひどひめあめゆる茶まらね茶から茶まらね茶まらね茶まらね茶まらね  
 た深物げじのだんごらぬさう骨折らぬ笑止や。牙ハきられ材の骨は茶師  
 溜溜細めするでも。えんまらるでも茶も雄子猫もろく濃氣血をまわり溜  
 忽ちふ蒸赤者もいんまらる茶のまらるび茶をみるく溜も茶谷もはる茶師  
 茶もまらる茶もまらる茶もまらる茶もまらる茶もまらる茶もまらる茶もまらる  
 海のものおむ常持の目達一の深はは深殺されぬをえあ。その体と云し  
 茶深腰を加ふるもまらる茶もまらる茶もまらる茶もまらる茶もまらる茶もまらる

況やまをるぐ人々其の誰ぞとて此の若衆を亦くも野大師の膝えさうだ。  
愛深明王の懐に抱きし指や尺八鼻拾り拵つてすちらつてそあのて歩行。  
大坂六十六町は隠れもあいの丁令の文七と好近よりそあがみまされ。

○ 中んの平ありんせりぬ

坂東彦之助

いづれの名をあらうりしどろりぬ二日月の阿蘇野に安といふ字の五所さうい  
男の紋うろくする故をえさるるまをそれ安の一字を流法して中んとどむに  
笑さや。安心は定とて耻笑しうま晏平仲う人と交るえちりてけいそと  
論語といへるしと書よ。志は垂る馬鹿律義安福山が亡びし唐人仲間の穀  
は中し安福天皇のあま這入の足法盛が因果経安福門流の内裏のおよもた  
安西の流七の十番切のごうまじ。めんがう鳥の悪まれり。晏火の火神のあま  
故り能ハ火燈のあ親。めんちく者ハめん餅まあまされめんちやハ修験での  
銭とり病ハ安神敷い血の案めんを更腐ハお齋の平血園ろるる地獄の



中村彦

大谷度治

身月五男  
あけの千ちち  
あくお千ちち  
沢村宗十郎

鍛冶名劍揃のせりぬ

大谷り

いろは奇の  
せりぬ

夜道安然和尚の建立より。安寿の船の對王が婦子安中の上列の馬次あん  
 るるの達が圓生按察のけん。これ針の齋治令計浪計け平計さるる事  
 抜甲早ら肩あんの打物因りして。あるをきまひの肩先うら。悪血をたてると  
 ぶい。そのあんとでも咽同を唱じてみるくまゝの曉五十六億七千人の使  
 の親方男達の内あん佛安國論お説きする。あんの仁王の又従安の平窟つ  
 とらふ安河流の化能皆よりて岡懐ひろげん。

○ かく市を備つせり殿

大谷 廣 治

「さうばうららもらるるべらおりの小仏が。そお造美の面白さに申のく大佛  
 も。まんがり悲くまやぶらぼん丸を菓子盆るんやまると核ひ清めなる抑此  
 父男の唐王經山寺のいん布袋花かんらん吉野へこざれ腹がらん。と膝  
 きり。あてとくと契約ら。は回らうのまやじさ。あんどいらはにはて市を備つ  
 三の耐の髪垂より。そや糸髪費ふするところし。せれもなな髪髪の元らりねる

大岩危よだれきよつねならむらおのたぐ歯て栗えひ。もぢまけらうこの  
 吸物よ。あまき屋ゆあも極ひ五奉七々町八かぞと神手鹽まで。りりて。  
 い。香てもあひもせず。赤大坂ををめぐらて江戸へ。お別條さん。即本宮節  
 小山室。じ。ん。身好むらもあ。ら。更。う。そ。新町。ひ。踏馬。あ。ん。の。猿  
 けりも。法。の。ひ。づ。も。欠。く。と。も。ら。よ。ら。の。ま。ま。ひ。の。の。赤。坊。や。ら。畜。士。の。入。港  
 きて。これ。を。の。経。か。ら。び。く。を。し。て。海。へ。お。目。の。入。出。で。さん。た。を。む。ら。げ。足。う。列。急。悲。の  
 殺生光明。遍照。十。町。世界。え。お。危。生。切。お。と。横。さ。も。下。も。ほ。ぞ。ん。の。あ。て  
 市を備つとら。男。ま。の。い。れ。は。の。め。り。

○ かく千を備つせり殿

沢村 宗十 節

引の秘にして。はておね。叔。ま。ご。好。舟。は。好。安。と。布。袋。と。一。令。と。と。入。り。は  
 文殊の女の娘。ち。あ。も。あ。ま。り。ま。も。あ。ん。の。四。人。め。の。馬。の。鞍。あ。ま。ま。ご。ら。せ。る。造。實  
 の。舟。用。小。う。ち。中。近。も。銀。治。を。仲。万。の。こ。ぎ。ほ。の。内。せ。う。様。の。ま。つ。不。と。勤。と。

といひ女即ち相槌のあつておちやの一人息子。数を集むる友切丸。此切ひ組  
 梅組の肩て風切のまゝいふらう。ゆゑにりつてまゝにむねひきりらぬ。國光。彩。五  
 大進坊。扱。先。堪。忍。良。刀。な。ぬ。の。ま。ひ。ち。ら。ま。い。で。も。月。山  
 でも。月。見。も。地。後。でも。も。ま。い。で。も。ま。あ。の。ま。ま。で。も。そ。を。極。む。こ。ら。ち。の。物。  
 志。を。湯。手。で。栗。田。は。ど。う。は。の。密。を。見。と。ま。し。う。わ。か。る。か。思。の。を。ご。ご。と。て。中。へ。い  
 な。せ。あ。れ。ば。え。た。れ。ぬ。は。を。兼。一。り。ん。ど。り。な。男。を。た。て。ま。す。の。小。刀。針。と。て。こ。の  
 ま。し。を。朝。の。ぬ。ら。う。る。ま。る。の。面。を。あ。ま。り。て。丸。の。元。文。字。や。く。く。と。あ。げ。と。く。  
 ぬ。へ。せ。れ。ど。う。の。戸。小。指。を。た。え。る。長。船。の。ど。う。だ。が。昔。朋。が。ひ。肝。病。鬼。の  
 浪。の。ひ。も。行。も。あ。う。れ。ど。ま。み。足。も。不。動。の。う。ま。織。り。千。将。真。耶。が。く。の。鏡。  
 縛。く。び。て。赤。鯛。ま。い。は。し。て。これ。を。ま。ま。を。者。は。別。れ。は。小。糸。さ。の。盛。る。て。盆  
 か。ら。の。ま。國。正。家。の。ひ。ひ。ま。ま。と。並。と。集。む。て。利。刀。か。ら。の。あ。つ。そ。り。と。坊。ま。い  
 なる。て。か。つ。を。と。れ。血。脈。を。授。け。い。天。の。村。雲。十。束。の。劔。の。草。薙。の。え。ん。え。ん。と。い。

冬月五男

第三番 中村彦



雷庄九郎  
市川團十郎

百人一首  
名寄のせりぬ

大あつり

園の孫六せき入坊志保の三郎きくち者その中とて境のうらふきり  
うらひの幸領てらふ極下子に備へるまぢとてぬとも月とひらけす

〇 かのりの庄九郎せりぬ 市川團十郎

一丈七が深松注文平を清つが安の字にじ。ちて市を備へるいはあせ服冷をの  
あゆむが名叙揚咽つゝの往來かまびだく願ひ切閉ごうごうと古吹あなな  
年齒あがり。尻佛ひひくる。以上五人の組改雲の上る雷とも願の美ふ  
を較の接鼓きはしのでのめで骨天上天下唯我毒は出づらばとも思ひ  
を一首備ふうとれい新令古今の序よ花を常えはたなふははるる番の  
声までぬぬとる西のつとるらると。まはつとあかが筆の跡と十字ひとり  
匪蒸とひき氣隨の芋掘地天もろろ地どろ天宮の流刺夜を産てかうも  
宵ふ秋の国のかり令丈七が秘入者もて我まのりのも露お流る。流のあげく  
りでもは古接そろうやうをるること。なぐきふもののは小世郎めくかこた

ぞと入る人逃げぬ時もの一ちぢららのまごひごんがうぬれ鹿衣あごてま  
あまふまふらまふとてそと類らり。志保の村の本のとさる山檻の赤見のサ  
あごの浦に打きてなれが白瓜や蘇のらるる脊に歩つ猿松を甲納言  
中江餅あ倍茶のあらる湯せん法師山せのじまうみまごんら。あらるとま  
雲いひる。一丈七とて二丈やらうと支野の初とて田とるしつもあたま  
辭六舞念佛の証を敷て七丈未滿のかき大持するの何ふ追送ふぞ八丈の  
赤女も。くまのたの気あふくとをちりてする庄九郎おらならが肩を並るうら  
わらちも切ぬる別回これ七丈の羽とて壽命の縮む死る。蘭を女あれんけ経と  
妻や子供も名残を惜み沐浴湯灘の丸裸ともたたらと切念して脚を指て空明  
を待ごしおちちやうもあらるしそ脚を指ても葉あてもこまらうでも止らぬやまい  
かう鳴出とてとてうがみ雲雷がせいせん。のせうぬかうとて千代の大服指懸りの丸と  
名号て一文字中指まに回の皮の禪をあらるうらむ淵の両のめち車軸を長せりふ



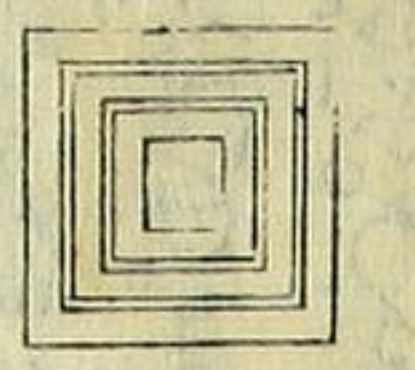
田村屋をも兵へどかてくこに跡多先并らむせう紐魚の島子かり合文七の人の  
 平太衛門にて市を備へてかかればおきつゝえん大將雷庄九郎一馬も白  
 御しむらむん男達の五人組とあり共入らうやまうてまうに。

寛活陸奥内裏 安忍の責任に坂田守五郎。字任五坂東又十郎。

おのえの糸早川新勝藩倉権五郎写見五郎や郎より。事保十六支年春中村座

はせの福屋護屋 園十郎万をよし清羊玉賣のせりぬ古今の大評判

名護屋山三郎十郎けのせんかづら糸を懸せげんそれらの八兵衛本名  
 由井が濱の忠雪小廣治かきと足身れ名のり合の所中の取より  
 時代の花中りれ糸あまの衣おきなる物語今も残れ親き時をわたり  
 とつてのまことつらく世話狂言より時代よりなる衣おき廣治の工夫



福屋護屋

羊玉

仲村座



羊玉

扇子賣の

せりぬ

市川園十郎

年玉扇子賣れせりぬ

市川團十郎

袖をりて結び一糸の氷を春まゝの風和しを枝をなぐさぬ松飾まき深  
 くと掉娘のかのり次女を中お享保二八の折に惚きさるあせあつは  
 高を幸け亥の年玉巳午の間第をよし多清玉玉のれあくと賣下  
 高は例年管ねぬおまきの何きもぬり買上りあつり決まけま  
 先年玉の身一ハからせだた聖仕はあせくくく返りおまきり  
 の之入又五日れぬ中入焼杖りの三臺あせお中夜舟の七宝はく  
 るりもてとやと瑪瑙さんあお梅は泣や砂子切箱丁子と開け梅香  
 にあせ物たる緑今一月の夕夕引志めて緩めて結昆布花のぬ  
 よらんぬ神明あも松前もふ里同風ま風まといて流る水節やた  
 餅へはけさもうはさうかもちやくと嘗のり松のま月やかん又  
 菓子あつひの宝珠の玉あせとふとせとのある長命草はるの  
 紙書始まふより初書よみ初赤あふの糸よてたろん寒のぞお梅枝  
 大長おんらぶじ并山より津株やまの油よまゆ糖香さび同長下法  
 雪踏踏のたれは梅がけし年玉双のそみ箱さく坊主の丸裸ゆへも  
 宝刀繩まごころあつとさるあつて七子りるや七福神さびと  
 お福八月は豆扇て外へ打出と鬼の面やん多雄日本のを渡らぬ  
 仇切縫毛ぬき小刀鉄火に洞枚子よまき大花のはらき  
 そりこ糸くらくとち海りあまの音羽山ははらき  
 三笠松糸せん茶ちん袋四月袋入つと小判せん大判豆板ま  
 令入中免たご入けんぢり服紗まま巾被まはしとぬん入連六の  
 まつあもかきに道分じんまはりののみかやから栗密柑かじ橋の  
 ともろまきそやから糸を際まで別込こあけつれまらぬ  
 福引名護屋のとり玉商人が見世まとも賣さるぬとお致てあせく

紙書始まふより初書よみ初赤あふの糸よてたろん寒のぞお梅枝  
 大長おんらぶじ并山より津株やまの油よまゆ糖香さび同長下法  
 雪踏踏のたれは梅がけし年玉双のそみ箱さく坊主の丸裸ゆへも  
 宝刀繩まごころあつとさるあつて七子りるや七福神さびと  
 お福八月は豆扇て外へ打出と鬼の面やん多雄日本のを渡らぬ  
 仇切縫毛ぬき小刀鉄火に洞枚子よまき大花のはらき  
 そりこ糸くらくとち海りあまの音羽山ははらき  
 三笠松糸せん茶ちん袋四月袋入つと小判せん大判豆板ま  
 令入中免たご入けんぢり服紗まま巾被まはしとぬん入連六の  
 まつあもかきに道分じんまはりののみかやから栗密柑かじ橋の  
 ともろまきそやから糸を際まで別込こあけつれまらぬ  
 福引名護屋のとり玉商人が見世まとも賣さるぬとお致てあせく

世のゆかりニテ行田のかくろり人形を以ておひひ付まきりけ内小をど脱よる。今このゆかりに付し始る同狂言不破伴作。市川弁五郎名護屋小山之小。沢村亀三郎友人六法丹前せりぬ大伴新美。忠かつていりて無間の鐘の狂言とて勤れ滅小古今の大ありなり。

○サマ間の鐘と車遠江國佐屋郡西山村に無間山観音寺の治浄と撞が未末のまの地獄小おけるといふも。此世めてハ富貴の身とある。このまの事を狂言と取組え禄二巳年大坂荒木と次兵衛座と。傾城小夜の中山といふ名題小谷鳴らるといふ名女形とせんせい。うらとめて鐘とけく小僧とじりなり。其後え組芳沢あやと京都早雲ゆめて鐘と持くその附の小僧へる木辰之助とありつえ禄十四年のゆかり又享保十三年春京市山助五郎座めて瀬川菊之丞

庄五六を備へ娘おとほめて勤れけ付越向をかへる水とら次撞よまごりて打しが始りといふ同十六年亥春中村座めてかつたあて勤体初日舞臺めて合をけしむおつれぬる衣裳の袖とまてふ。川切りし其のあひ入よりかりしゆ急翌日よりそのゆりおせしとや。その後大坂竹本流後掾座めて元文四年未四月十一日。おつらる盛衰記といふ新浄溜理初日なり。足福引なごやの事と忠の之間の鐘取組がらり。浄溜理の文向も袖とちぎり二百返けしむあまるよろとび泪とある事。瀬川の家の藝代とれまされなり。

右福引名護屋大あめて。五月晦日まで四夜目。大谷彦治山名入道の役。山をとりこめて伴作備門が支眼をくりぬ。伴作備門日月の旗の徳とて眼開き門破りの荒事大當りし。同秋狂言市村座ハ大角力藤戸源氏佐木

の二郎盛細小坂東彦之郎おぬいふ佐野川万葉かき移れと條効を即ち  
中村新五郎依々木おきし船よき彦之郎藤戸の先陳りのがら川のもち  
あて移五郎かき移をころとあけ合のせりぬ緒川紅の潮身二どん目市村  
竹之悪かき移がぬれり恨の所鬼女のありさまあそら此狂言彦之郎万葉  
伴之悪之入死豊嫁入小袖のかけ合せのぬ作者津打治兵衛同九平治大々  
あざり大入も新五郎同伴幼年富十郎万葉と人名残のは上車そのせりぬ  
大ひきりせん此狂見世より市村若き満前並ぬ後年亀茲又羽左衛門  
と成る下能事の名元祖より以その上手と世にぞらてあそりあそり同座  
夏狂言あの下り市川宗之郎は塚持翁あそりは合長サ九之の鯉はけりひ  
大浮判りの中村座の智傳受錦の編小平をまむらりの大谷彦治鬼は新左衛門  
沢村宗十郎女房妻木に業と悪後者九備門丸團十郎小栗か白氏中村七三

けいせい照るお救世守之郎より同切狂言首途鳥帽之地大住源太丸團十郎  
さうま源五彦清彦治女房おん業と悪世野之五彦清宗十郎女房小袖  
と橋野並のゆうかん小南右備門此狂言浮判よして不入りの霜月市村座へ  
瀬川彦治郎下中村座顔見勢和合字太記この各頭とあけあつて團十郎  
團十郎不知おを級所と外よと月如此はけをけとび和合して十八年より  
あそり一の字を取るあそり合とあそり狂言の三外あせり團十郎の楠正行團十郎  
とあそり正則の役大あり市川升五郎楠多門丸五とあそり官軍迄到各のりお  
あそり役者りんげしのけり大浮判畑之郎左備門宗十郎しづも大あり  
同十七年春中村座初曆内が鬼王團十郎宗之郎團十郎又藤さけつ編  
宗十郎その十郎佐渡長五郎の所附宗守之郎小若と南右備門八つ編  
鳴見五郎は郎二どんめ團十郎喧嘩玉の所右備門同女房おん瀬川菊三郎

大目録七代目 十一 十一

大角（りいさうり）五郎吉市川（りい）五郎。りいせりぬ大評判なる。同年秋狂言

中村座大銀景清（おんむら）此名頭元祖園十郎（おんじ）終より二十九年。至十郎市村座乃

勤（とこら）りなりし所（あむつ）の霜月（あむつ）顔見世（あむつ）相澄極（あむつ）。名残狂言にて園十郎景清（おんじ）母と

銀杏（いんぎょう）の木（き）の洞（らう）は年（とし）久（ひさ）く（く）行（い）く（く）橋（はし）の木（き）れり（り）と行（い）と（く）熱向（あつむ）園（おん）五（ご）景清（けいせい）

忠光重忠（あつみつ）母（はは）十郎人（じやう）丸（まる）姫（ひめ）五郎（ごらう）親子（おやこ）の名（な）景大角（けい）五郎（ごらう）

享保十七年（けいほうしちねん）霜月（あむつ）中村座（なかつむら）へ姉川（あねがわ）新四郎（あたらしくしやう）神山（かみやま）小四郎（せうしやう）と（と）顔見世（あむつ）市村座（いちむら）

兵相源（へいさげん）小嶋（せうじま）園十郎（おんじ）さ（さ）ね（ね）の（の）市（いち）仕（し）せ（せ）切落（きりおとし）の見物（けんぶつ）の中（なか）より（より）之（この）升（のぼり）付（つけ）

自（おのれ）拭（ぬぐ）類（たぐひ）か（か）ふ（ふ）り（り）て（て）大勢（おほいせ）之（この）升（のぼり）さ（さ）ぬ（ぬ）当（あ）り（り）ほ（ほ）し（し）と（と）母（はは）と（と）打中（うちな）に（に）浅（あ）き（き）お（お）し（し）る（る）げ（げ）

女（おんな）園（おん）十（じ）さん（さん）昔（むかし）の（の）ほ（ほ）した（した）と（と）側（わき）へ（へ）と（と）寄（よ）る（る）狂言（きやうげん）の（の）志（し）や（や）ま（ま）と（と）田場（のりば）の（の）せ（せ）い（い）を（を）も

ま（ま）と（と）お（お）し（し）る（る）足（あし）之（この）條（じょう）勘（かん）を（を）即（すなは）ち（ち）それ（それ）より（より）狂言（きやうげん）母（はは）成（な）は

見物（けんぶつ）母（はは）一（ひと）を（を）ん（ん）と（と）熱向（あつむ）評判（へいはん）ば（ば）涼平（りやうへい）兵相源（へいさげん）清（せい）お（お）坂東（さかとう）考（かう）之（この）郎（らう）

△合本へはづく

